

# 第一楔状骨骨折保存療法の一症例

(社)大阪府柔道整復師会

淀川ブロック

樋口 正宏

# 【目的】

- 文献を調べても足根骨骨折の中で踵骨・距骨・足舟状骨についての記載は多いが、楔状骨骨折についての記載は一部脱臼骨折を除いてほとんど無い。
- また、今回の症例のように介達外力によるものは稀と思われる。
- 内側縦アーチのかなめ石となる舟状骨、第一中足骨と関節し荷重時も接地しない事から舟状骨、第一中足骨からの圧迫力は大きいものであり骨折部も不安定であると考えられる。
- 今回それを踏まえ固定法、固定期間を決定し良好な結果を得たので報告する。

# 【方法】

## 《症例》

42歳 女性

〈受傷機転〉

テニスプレイ中後ろ向きにボールを追った際右足関節捻転負傷。

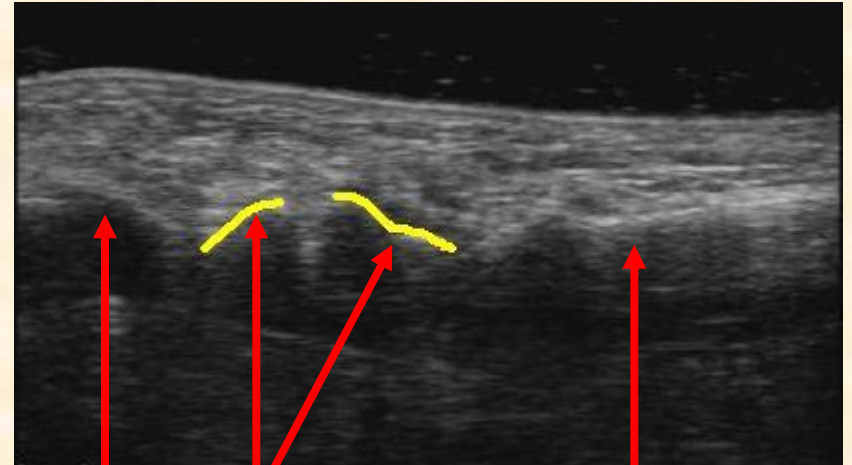
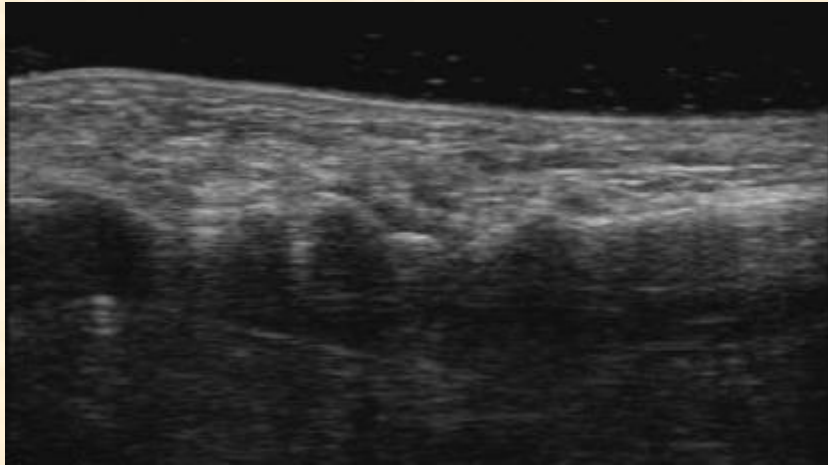
〈初検時所見〉

右第一楔状骨限局痛(+)、右足背内側腫脹(++)、  
右第一中足骨よりの軸圧痛(+)

〈傷病名〉

右第一楔状骨骨折

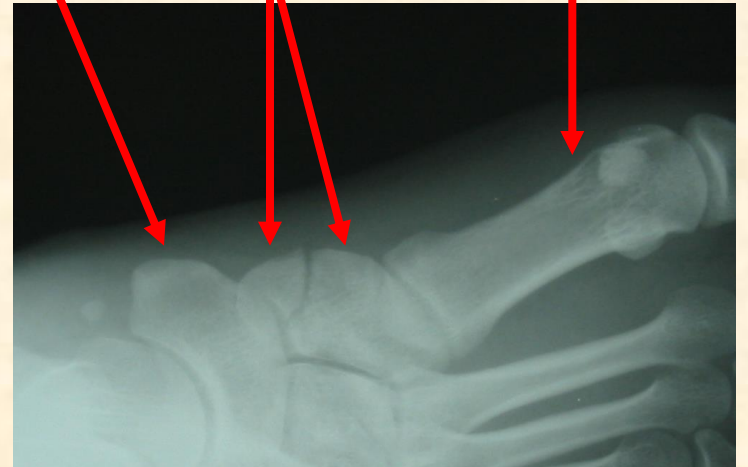
# 初検時エコー画像（内側よりLONG）



舟状骨

第一楔状骨

第一中足骨



## 〈初検時エコー画像〉

- 内側より長軸 (LONG)
- 骨折部の離開が認められた。

# 初検時X-P像



## 〈初検時X-P像〉

- 正面像より内側部1mm程度の離開転位が認められた。
- 側面像より末梢骨片1mm程度の背側転位が認められた。

## 〈整復法〉

- 転位の程度より整復不要と判断した。

## 〈固定材料〉

- 初検から3週間、キャストライト8、オルテックス、ストックネット。
- 3から8週間、ポリキャスト、ストックネット、巻軸包帯。

## 〈固定肢位〉

- 初検から3週間、足関節基本肢位(0度)。
- 3から8週間足関節フリーとした。

## 〈固定範囲〉

- 初検から3週間、下腿上1/3部よりMP関節まで。
- 3から8週間、足底板(踵骨後端から趾尖)とした。

## 〈固定期間〉

- 初検から3週間、短下肢ギプスとし免荷。
- 3から5週間、足底板とし免荷。
- 5から8週間、足底板とし徐々に荷重。
- 8週間後固定除去し完全荷重とした。



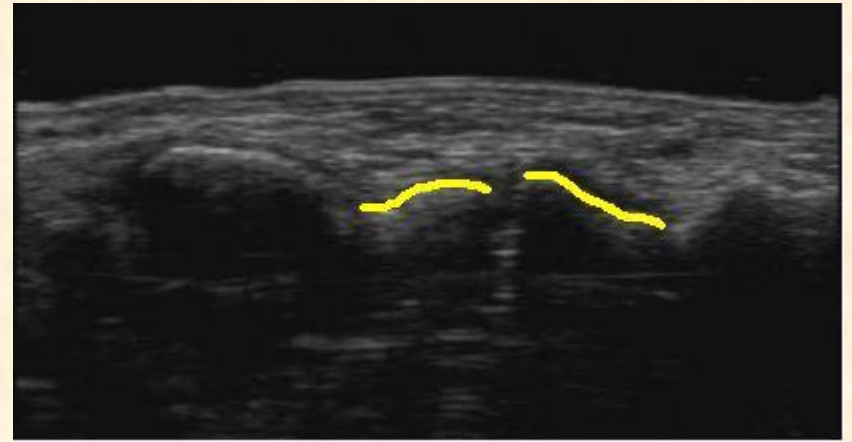
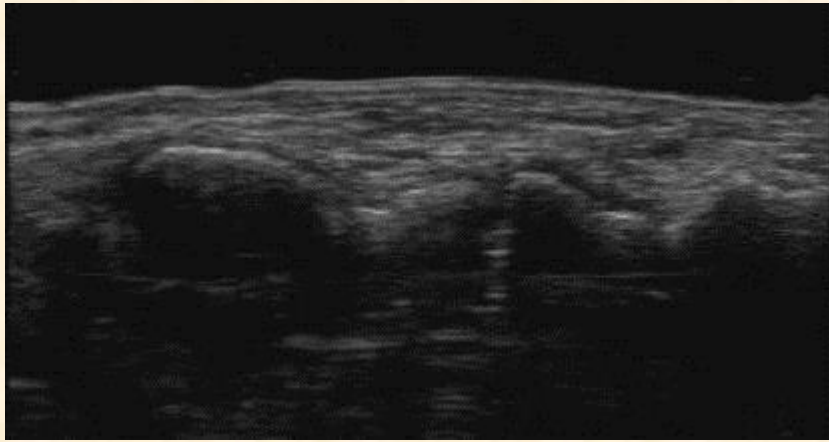
# 短下肢ギプス固定



# 足底板固定



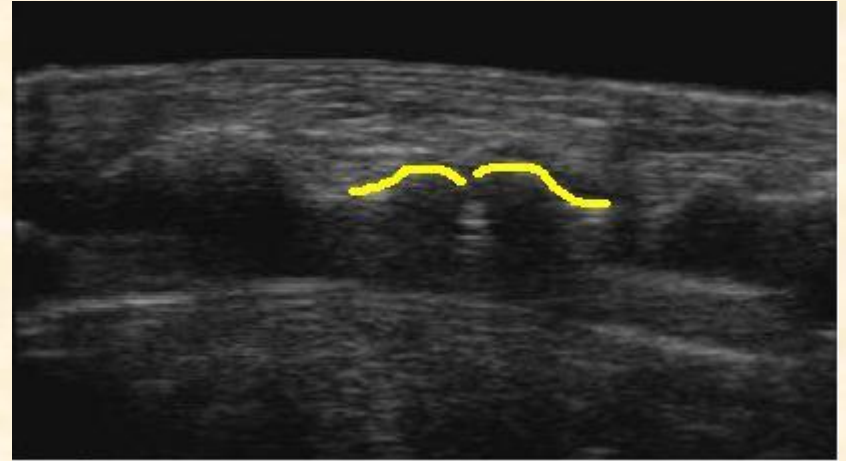
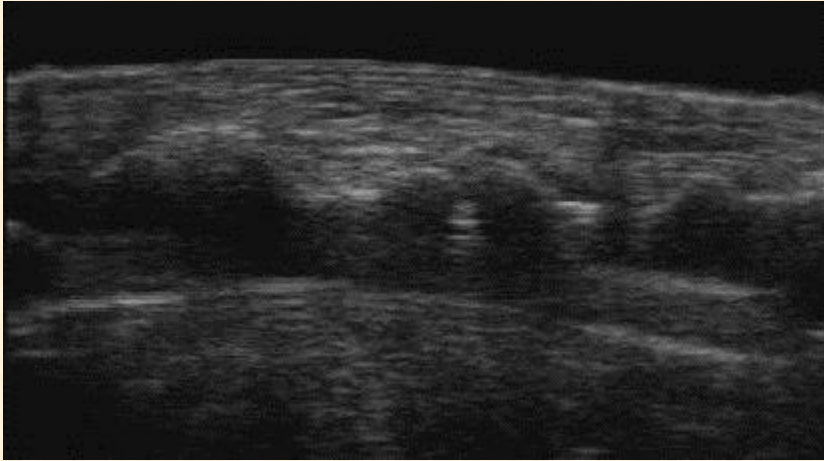
# 5週間後エコー画像



# 5週間後X-P像



# 8週間後エコー画像



# 8週間後X-P像



# 【結果】

〈5週間後エコー画像〉

- 内側より長軸(LONG)
- 初検時よりエコーの進入が浅くなり、骨折端も丸みを帯びているのが認められた。

〈5週間後X-P像〉

- 正面像より第一楔状骨骨折部の外側より仮骨形成が認められた。

〈8週間後エコー画像〉

- 内側より長軸(LONG)
- 5週間後より更にエコーの進入が浅くなり、骨折端も更に丸みを帯びているのが認められた。

〈8週間後X-P像〉

- 5週間後X-Pより仮骨形成が進行しているのが認められた。

〈後療法〉

距腿関節、ショパール関節、リスフラン関節、中足趾節関節、趾節間関節拘縮のため、8週間後より関節運動を開始し12週間後運動制限なく治癒とした。

# 【考察】

外傷治療の際、常に固定範囲は最小限を心掛けており、その最小限は固定直後に疼痛が大きく軽減する固定範囲をもって決定している。本症例の場合、受傷直後足底板による固定を試みたが、固定後も疼痛が激しかった為短下肢ギプスに変更した。

また、短下肢ギプスのヒールの位置を踵骨下とした理由は、免荷としていながらもかかわらず仮に体重負荷した場合でもヒールを足底中央とした場合より骨折部にかかる負荷は明らかに小さなものであるという考えからである。

拘縮については、3週間後足底板に変更した時点より足関節フリーとしたため、距腿関節の拘縮は小さく可動域が早期に改善される事につながったと考える。

しかし、まだ多くの改善点はあると思われるので今後の課題としたい。



**【使用機器】**

ALOKA社製 SSD-900

SSB社製 ウルトラ三四郎

**【参考文献】**

図説 骨折・脱臼の管理〔Ⅱ〕第3版： Depalma, Connolly著.  
監訳者 阿部 光俊. 廣川書店. 東京. 1991.

**【キーワード】**

短下肢ギプス、足底板